

Title	ワイトゲンシュタインと言語的観念論
Author	高野, 保男
Citation	人文研究. 70 卷, p.71-89.
Issue Date	2019-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	井上徹教授 : 大黒俊二教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

ウィトゲンシュタインと言語的観念論

高野 保男

言語的観念論は、言語をぬきにした実在そのものを追求する哲学を攻撃し、我々に唯一与えられているのは言語ゲームの世界だけであると考え、「言語ゲーム」は後期ウィトゲンシュタイン哲学を代表する概念であるが、にもかかわらずそれに対するウィトゲンシュタイン自身による規定が包括的な（さらに言えば、精密さの欠けた）理解を許すものとなっており、それだけに取り扱いが難しい。そのような言語ゲームという概念の役割を説明するひとつの有力な解釈こそ言語的観念論である。多くの著名な研究者は、ウィトゲンシュタインを言語的観念論者とみなし、そのうえでウィトゲンシュタインを支持ないし批判している。本論文は、言語的観念論者を批判的に検討することによって、ウィトゲンシュタイン哲学の実相を捉えるには言語的観念論の修正が必要であることを主張する。具体的には、非言語的实践や、それを前提とした言語の学習プロセスなどをウィトゲンシュタインが視野に入れ思索していたことを確認し、日常生活を「あるがまま」見るというウィトゲンシュタインの中心的な目標を見据えたうえで、その方向性の魅力と課題を明らかにすることを旨とする。

はじめに

いわゆる後期ウィトゲンシュタイン哲学を論じるにあたって、「言語ゲーム」という概念が重要であることは言うまでもない。後期ウィトゲンシュタインへの関心は言語ゲームという概念への関心であると言っても過言ではないだろう。しかし、言語ゲームへの関心は、言語ゲームという概念の捉えがたさの裏返しでもある。

言語ゲームの捉えがたさは、主著『哲学探究』（以下『探究』）において「言語と言語が織り込まれた行動の全体」（PU, § 7）と規定される言語ゲームという概念が扱う範囲の、一見したところの無際限さに由来する。『論理哲学論考』（以下『論考』）における「事実を描写する鏡としての言語」というイメージ¹⁾への自己批判の結果、「語りうるものの範囲は無制限に拡大し」（永井 1995, p.213）、「どんな発言も、言語ゲームの中で何らかの意味を持つ言葉として解釈し変えられる」（ibid.）ようになったのである。

しかし、では、「すべては言語ゲームになった」（ibid., p.216）ののだろうか。ウィトゲンシュタインの功績を「言語がその意味の源泉とする実在（事実・事象）そのもの」という幻想を哲学から追い払った点に帰す研究者の大半が、そうだと頷くだろう。その見地からすれば、言語ゲームの外部は怪しい「実在そのもの」に他ならないからである。逆に、「実在そのもの」を追求する哲学に意義を見出す者は、同じ見地から、ウィトゲンシュタインを批判するだろう。だが、反実在論者としてウィトゲンシュタインを理解するということは、果たして、本当に「す

べては言語ゲームになった（言語ゲームに外部はない）」という帰結を受け入れることと同じだろうか。

本稿は、このような問題意識のもと、「すべては言語ゲームになった」と考える言語的観念論を批判的に検討し、それによって言語ゲームにはなお外部があること、また、その外部を視野に入れることではじめて理解できる人間の実践があることを主張したい。

そのため、本稿は次のような議論を展開する。まず、(1) 言語的観念論が後期ウイトゲンシュタイン哲学の解釈として一見もっともらしい形で成立することを確認する。次に、(2) 言語的観念論をその支持者と反対者双方の視点から検討し、言語的観念論には修正が必要であることを指摘する。最後に、(3) 具体的な言語的観念論修正案を提示し、従来の理解の枠に収まらないウイトゲンシュタイン哲学の魅力と課題を明らかにする。

1. 言語的観念論への接近

言語的観念論に接近するには、ウイトゲンシュタインが講義録『青色本』（以下『青本』）で行った、心的プロセスなるものを否定する議論の確認を経る必要がある。心的プロセスとは、物理的な文字（言語）や音声（言語）に非物理的な意味そのものや理解そのものを与え、思考を形作るとされるものである。平たく言えば、これから見ていくのは、「言語と言語の意味源泉」からなる世界から「言語の意味源泉」とされる心的プロセスを除外することで、言語だけが存在する（すべては言語ゲーム）という言語的観念論が完成する、という道筋である。

ウイトゲンシュタインによれば、心的プロセスは言語の表現形式の見かけ上の特徴から要請されるものである。つまり、「日常言語の語が一見して類似した文法を持っていると、我々はそれを類似したものとして解釈しがちである」(BB, p.7; cf. PU, § 11)。見かけ上の表現形式の類似性を真の類似性だとみなしてしまうことで生じてしまう困惑こそ哲学的問題の正体に他ならない。ゆえに、哲学的問題への適切な対処法は、それを正面から解くことではなく、その背後にある、言語の異なる表現形式の間に類似性という関係を作り出してしまうという考えの癖のようなものを矯正することで、問題自体の疑似的性質を暴露し、消去することとなる。

むろん、一口に言語の表現形式（文法）といっても、その種類は膨大である²⁾。哲学者は言語の表現形式を（たとえば「ものの名前（名詞）」という）類似性の観点から無理に整理することで、その種類の膨大さという特徴をなかったことにしてしまい、代わりに、そのような整理さえしなければ避けられる困難を生じさせてしまう。

「長さとは何か」、「意味とは何か」、「数1とは何か」といった質問は、我々に心的けいれんをもたらす。それらに答えるにあたって何も名指すことができず、それでも何かを名指すべきだと感じてしまうのである。（名詞がそれと一致するものを我々に探させるという

哲学的混乱の大きな源泉のひとつに我々はぶつかっているのである。) (BB, p.1)

このような困難への哲学的な対処法として提案されるのが、語の運用に不可避免的に介在する理解そのものや意味そのものといった心的プロセスである。

言語の働きには、それと結びついたある明確な心的プロセスがあり、それをとおしてのみ言語は機能できるように思われる。そのプロセスは、理解し、意味するというプロセスのことである。(BB, p.3)

心的プロセスを想定することは、本質的なのは言語ではなくその意味たる心的プロセスであるという考えにつながる。というのも、言語記号はあくまで文字や音声といった物理的存在であり、それだけでは「何かを意味する」ことができないと思えるからである。こうして、言語にとって心的プロセスが不可欠で原理的な意味の供給源とされるのである。

くわえて、その心的プロセスは我々が広く「思考」と呼ぶものを構成する要素とされる³⁾。もとより、様々な身体的動作と並んで思考を想定することはきわめて自然である。たとえば、様々な楽器の中からバンジョーを取ってくるよう命令されたとき、「バンジョー」について思考(イメージ)すること、どれがバンジョーなのか思考(解釈⁴⁾)することなどは命令の実行にとって不可欠であるように思われる。そして、そのどちらも非言語的なプロセスとして理解できるように思われる。実際の行動が行われる場(世界)とじかに触れ合っているのはあくまで心的プロセス(思考)であり、言語が必要となるのは、一連の行動を誰かに伝達する場合にすぎない、というわけである。

言語が思考にとって本質的とはいえない以上、問題は思考を構成する心的プロセスとは一体何なのかということであることになる。「心が行うことが可能であるには、そのメカニズムはとても独特の種類のものでなければならない」と我々は言いたくなる」(BB, p.5)。当然と言うべきか、ウィトゲンシュタインはこの問いの消去を試みる。そのさい注目すべきは問題そのものというより、その成立プロセスであり、その源にある言語の表現理解をめぐる混乱である。

問題の成立プロセスとは、我々が心的プロセスに何らかの説明能力を認めるというそのことである。ならば、それに言及せずに済む説明図式を出しさえすれば、問題も起こらないということになる。

思考のプロセスのオカルトじみた見た目の少なくとも一部を避ける方法がひとつある。そのプロセスにおける想像力の何らかの働きを現実の対象を見る行為に置き換えることである。たとえば、少なくとも或るケースにおいては、「赤」という語を聞いて理解するとき、赤のイメージが私の心眼の前になければならないということが本質のように思えるかもし

れない。しかし、赤の斑点をイメージすることを赤い紙切れで置き換えてはなぜいけないのか。(BB, p.4)

「赤」という色名は、林檎やポストなどに共通で、ゆゑに、そういった物理的対象と同一視できない、我々が思い浮かべる赤のイメージそのものを指しているように考えられる。しかし、そのような心的プロセスの介在は、場合によっては可能でずらない。

たとえば、あなたが「紺青色」と呼ばれる独特の陰影の青に塗るよう命じられたとしたら、「紺青色」という語から表を使って色のサンプルへと導かれ、それを見本とする、ということをしなければならぬかもしれない。(ibid.)

ウィトゲンシュタインは、このように、思考を心的プロセスから引き離そうとする。そして、言語の表現形式の多様性に再び着目させようとする。その結果、心的プロセスは、名詞であるという共通点を過大視し、「林檎」が指示対象を持つように、「長さ」や「数1」といった名詞に指示対象をあてがおうと試みるという、言語の表現理解をめぐる混乱の結果要請されたものにすぎないということが強調されるのである⁵⁾。

一般名辞の意味づけを明らかにするためにはすべての適用に共通する要素が見出されねばならないというアイデアが哲学的探究を束縛してきたのである。それはいかなる結果にも辿りつかなかっただけではなく、具体的ケースを無関係なものとして哲学者に放棄させてしまった。(BB, pp.19-20)

具体的ケースを受け入れることは、そこにおける多種多様な語の用法について「なぜそこに共通の本質を見出さないのか」などという問いを挟まないということである。「なぜ」という問いを我慢することで、我々はしばしばはじめて重要な事実に気づくことになる」(PU, § 471)。本質の問題だけではなく、一般に哲学は問うことから始まるが、それは、問わなければはじまらずに済むということでもある。

さて、次のような言語の用法について考えてみよう。私は誰かを買物にやる。私は彼に一枚の紙切れを渡す。そこには「赤い林檎5つ」と書かれている。彼は店員にその紙切れを渡す。店員は「林檎」という目印があるケースを開く。そして、表から「赤」という語を探し、それに対応する色見本を見つける。店員は基数を順番に「5」まで口に出して数え…(中略)…数ごとにケースから見本の色をした林檎を取り出す。…(中略)…しかし、「5」の意味Bedeutungは何か。—ここではそのようなことはまったく話題になっていなかった。

「5」がいかに使われたのかだけが話題になっていた。(PU, § 1; cf. BB, pp.16-17)

ここで店員の言動が露骨なまでに外から観察可能な形に置き換えられているのは、特定の使用に適っている言語は有意義であるという意味の使用説⁶⁾に我々を導くためである。

言語の中で考えるとき、言語表現のとなりにさらに「意味」が思い浮かぶわけではない。言語それ自体が思考の乗り物なのである (PU, § 329)

ここにおいて、事実伝達のさいにのみ思考にあとから与えられる外装ではなく、思考そのものの構成要素としての言語記号という考えが提案される。そうすることで、思考の構成要素を心的プロセスとする道は遮断され、「心的プロセスとは何か」といった問題も起こらないことになる。

私が言語ゲームと呼ぶものに、これから何度も注意を引くことになるだろう。言語ゲームは高度に複雑化した我々の日常言語の記号より単純な記号使用の方法である。… (中略) …そこでは、高度に複雑化した思考のプロセスという混乱を招く背景ぬきに思考の形式が現れている。そのような単純な言語の形式を目で見ることで、我々の普段の言語使用を包んでいたように思えた心的な霧は消え失せるのである。(BB, p.17)

言語ゲームという概念は、このように導入される。つまり、我々が言語について考えるさい想定しがちである心的プロセスを省略するために導入されるのが言語ゲームなのである。それによつてはじめて、我々は「語の目的と機能をはっきりと理解できるようになる」(PU, § 5)。

言語から独立な心的プロセスが思考の構成要素と考えられていた時点では、思考のために言語は究極的には不要とされていた。しかし、実際に我々が「思考とは何か」といった問題を検討するさいに行うのは、非言語的な思考という心的プロセスを何らかの方法によって観察することではありえない。そもそも、非言語的な思考などという言語とは異質なものを独立に取り出すことは不可能である。思考について何かを説明することは言語ゲームについてさらに言葉を継ぎ足す行為にならざるを得ない。

言語の次元で問いを停止することで問題成立の必要性そのものを否定するというウィトゲンシュタインの方法論は、「言語ゲームを第一次的なもの das Primäre として見よ」(PU, § 656) という要請に結実する。それは、言語 (の次元) の外部が存在すること、そこに我々が立つこと、そして、それによつて思考することの可能性の否定を伴う言語的観念論への誘いである。

言語的観念論は、先の「おつかい」のような言語の個別的で社会的な実践が支配する世界と、哲学者が求めるような包括的で個人的な思弁が支配する世界との二分法を拒否し、後者が前者

に先立つという議論ばかりか、そもそも後者のような世界があるという議論をも幻として否定する。ワイトゲンシュタインからすれば、多種多様な社会的実践を無視し、個人的な思考プロセスを辿るだけで接近できる世界の实在を前提とした哲学のような思弁は知性が罹った病気であり、その足場を奪うことは病気の治療に他ならない。ここで扱ったのは、ある語が名詞であることとそれが名前であることを同一視してしまうという混乱による病気だったが、むしろ、無視される言語実践の多様性に応じて様々な病気の症状があり、「様々な治療法がある」(PU, §133)。

2. 言語的観念論の検討

言語的観念論は、個人の思弁によって正しさを確保していたと思われていた様々な信念が、それ以前にまず社会的に担保されたものでなければならなかったということを強調する。つまり、主観的な「心(精神)」の働きによって客観的实在についての信念が獲得されるという従来の哲学的な「主観/客観」図式に基づく世界が(哲学病の原因として)否定され、言語ゲームが「第一次的なもの」(PU, §656)である間主観的な世界が代わりに導入されるのである。

間主観的な世界から独立した客観的实在を否定する「人間中心主義」として言語ゲーム論を解釈したペアーズの理解⁷⁾を批判的に受け継ぎつつ、「言語論的転回」の担い手としてワイトゲンシュタインを描いたのが、「プラグマティックなワイトゲンシュタイン主義者」(Rorty 2013, p.130)⁸⁾を自称するローティである。プラグマティックなワイトゲンシュタイン主義者は次のような2つの信念を誤っているものとみなす。「ひとつは、言語が知識の媒介物となれる理由は、言語がある独特な点で非言語的なものに縛りつけられているということだけ」(ibid., p.131)という信念であり、「もうひとつは、科学のイメージは、世界の本当の在り方を伝えることで、何が非言語的なつなぎ目として利用できるのかを伝える」(ibid.)という信念である。

ローティが「非言語的なもの」ないし「非言語的なつなぎ目」と呼ぶものを「心的プロセス」と読み替えれば、前節でのワイトゲンシュタイン読解がプラグマティックなものであることが分かる。思考を言語ゲームの外から言語(ゲーム)を意味づけるものではなく、言語ゲーム(の一部)として扱うワイトゲンシュタインが、言語の説明原理としての言語の外部(非言語的なもの)を認めないことは明らかだからである。

我々の誤りは、「原現象 Urphänomene」として事実を見るべきところで、説明を探すことである。つまり、そこで「このような言語ゲームをやっている」と言うべきなのだ。/ 我々の体験による言語ゲームの説明ではなく、言語ゲームの確認が問題なのだ。(PU, §654.655)

言語はただ有意味であるのであり、「言語外存在からの意味獲得」というイメージ（像⁹⁾）は捨て去るべきだと、ウィトゲンシュタインは主張しているのである。

このようにイメージを「置き換え」（Rorty 2013, p.131）る動きそのものが言語論的転回であるといえる。転回後の世界では、「哲学の全靈魂が一滴の言語論へと凝縮する」（PU,ix,強調引用者）。ローティの言葉を借りるならば、「我々は言語を用いなければ世界について…（中略）…考えることができない」（Rorty 1982, xix）、つまり、「言語の遍在性ubiquity of language」（ibid.）を承認することなしに世界について考えられないことになるのである。

言語の遍在性を承認した世界における言語的観念論という「一滴の言語論」を、黒崎宏は「言語ゲーム一元論」と呼ぶ¹⁰⁾。それは「〈言語ゲーム〉の世界こそ、我々にとっては唯一の〈所与〉であり、全ては、そこにおいて考えられねばならない」とする思想」（黒崎 1997, p.43）である。言語ゲーム一元論に沿って考えることは「世界とは、初めから、言語と織り合わされてそこに在るものであり、言語に先立つ世界、というものは、一切存在しない」（ibid., p.98）とみなすことに他ならない¹¹⁾。

このような解釈は、ウィトゲンシュタインが与えた「言語と言語が織り込まれた行動の全体」（PU, § 7）という言語ゲームの規定をパラフレーズしただけのもののように思われるかもしれない。すると、言語的観念論（言語ゲーム一元論）こそ、ウィトゲンシュタイン哲学の終着点だということになる。しかし、そう考えることは早計である。

そもそも、言語的観念論が拒絶する「言語に先立つ世界」は二通りに解されうる。ひとつは、「言語抜き思考そのものからなる世界」である。すでに見たように、ウィトゲンシュタインがこのような世界の実在を否定しているのは明らかだろう。もうひとつは、「言語を操る生物（人間）が誕生する以前に存在する世界」である。そして、これから検討するネーゲルのウィトゲンシュタイン解釈（批判）は後者に関わる。

ネーゲルがウィトゲンシュタインを批判するのは、ウィトゲンシュタインが、人間の社会的実践とは独立の客観的世界を追求する営みの意義を否定しているからである¹²⁾。ネーゲルはウィトゲンシュタインのこのような姿勢を例証するものとして、『探究』における次のような議論を挙げる。

「円周率の無限の展開に「7777」という群は現れるか現れないかであり－第3のものは存在しない。」つまり、神にはそれが見えるが、我々には分からない。しかし、これは何を意味するのか。…（中略）…ここで排中律は、そう見えるか、ああ見えるか、どちらかしかない、と言っている。したがって排中律は実際には－自明であるが－まったく何も言っておらず、我々に像を与えているのである。そして、問題となるべきは、現実と像が一致するかしないかだけである。この像は、我々に何をすべきか、何に従ってどのように探すべきかを決めてくれるように思えて、何もしない。というのも、我々はその像をどのよう

に用いるのか、分からないからである。(PU, § 352)

ウィトゲンシュタインからすれば、真の問題は「実際に円周率の中に7777という数列が現れるか否か」であって、それが計算（実践）してみなければ分からない以上、現実とは関係なく決まっている像（イメージ）は、いくらそれが排中律という論理的規則によって与えられるものであろうと役に立たない。しかし、ネーゲルからすれば、このような見解は、個人の思考可能性の領域を「現実の実践」へと押し込めることで不当に狭くし、我々（人間）の眼前に現れている世界を越えた実在世界があることを認めない、「謙虚さに欠ける」(Nagel 1986, p.109) 人間中心主義的な考えである。

ウィトゲンシュタインの人間中心指向は、人間の思考に神の視点を認めない有限主義とも言い換えられる¹³⁾。しかし、ネーゲルによれば、ウィトゲンシュタインのこのような姿勢は、世界の実在に人間の（言語）認識が追い付いていない可能性を前提とする哲学（実在論）と対立するばかりか、人類の存在しない過去における事実（宇宙誕生時に何が起きていたか、など）や未来における出来事といった概念が自然である（哲学的反省ぬきに得られる）という事実に対する理解を歪めてしまう¹⁴⁾。問題は、前者だけならば単に「ウィトゲンシュタイン（および彼を支持するローティなど）とネーゲルとの見解の相違」ということで話が済むが、後者はそうはいかないという点にある。どういうことか。

言語ゲームを「第一次的なもの」(PU, § 656) とする間主観的な世界しか認めない言語的観念論では、それを額面どおり受け取るならば、人類の存在しない過去における事実や未来における出来事といった概念も間主観的に措定されるしかない。そして、それは、過去や未来といった概念は言語化されて（さらに言えば、同じ言語を使用する人間の共同体内で共有されて）はじめて事実になるということである。だが、この発想はこれら概念の真理性の確保というよりは、むしろ歪曲である。我々は遠い過去や未来の実在をふつつ否定しないが、それらは信念として言語化され共有されているから存在できるのだとはまず考えないからだ。

言語的観念論のこのような特徴は、ネーゲルの解釈に反して、他でもないウィトゲンシュタイン自身が言語的観念論を少なくとも額面どおりには受け入れられない理由にもなる。そもそも、ウィトゲンシュタインが哲学を批判するのは、哲学が人間の社会性を軽視し、包括的で個人的な思弁に陥ることで、多種多様で具体的な言語の「日常的な用法」(PU, § 116) が無視されてしまうからである。

哲学はどのようなやり方でも、現実の言語の使用に触れてはならない。哲学は結局のところ、それをただ記述することしかできない。／なぜなら、哲学にはそれを根拠づけることができないからだ。／哲学はすべてをあるがままにしておく。(PU, § 124)

哲学はすべてをただ据え置きにする。何も説明しないし何も推論しない。－そこではすべてが明らかになっており、何も説明するものがない。(PU, § 126)

にもかかわらず、仮に言語的観念論がそのままでは過去や未来の概念を歪曲してしまうとすれば、それはもはや「我々（人間）によって言語的に認識されてはじめて世界は存在することになる」とでも表現できるような特異な哲学説と大差ないものである。それをウィトゲンシュタインが批判こそすれ、積極的に受け入れることはないだろう。言語的観念論には修正が必要である。そして、それは可能である。ただし、その修正には言語的観念論へとつながる見解がはっきりと明示されている『探究』よりあとに書かれた覚書からなる『確実性について』（以下『確実性』）での議論への理解が不可欠である。

とはいえ、この修正は、ネーゲルからの批判をかわすためだけのものではない。それは「言語抜き思考そのものからなる世界」の存在を否定する穏当な言語的観念論理解にも影響を及ぼす。具体的には、修正のプロセスにおいて、我々はウィトゲンシュタイン哲学の最終到達地点が『探究』ではなく、少なくともその先に『確実性』における言語ゲームの下部構造（基盤）をめぐる考察があることを確認し、それにより言語的観念論をより広い視野から理解できるようになるのである。

3. 言語的観念論の修正

言語的観念論修正の鍵は、ウィトゲンシュタインが哲学的思考に対立させる多種多様な言語実践の中に非言語的实践を数え入れていることを見て取ることである。そして、我々がウィトゲンシュタイン哲学から見出すべき「非言語的实践」とは、人間が言語を学ぶ以前の、動物的反応のみに頼って世界に相対している段階のものである。生まれながらに言語を使いこなせる人間などいない以上、この段階を無視することは、「すべてをあるがままにしておく」姿勢に反するばかりか、ウィトゲンシュタインが提供する言語ゲームをめぐる議論を見誤ることもつながる。

とはいえ、ウィトゲンシュタインに言語的観念論を見出していた論者も、生まれながらに言語を使いこなせる人間などいないという事実を無視していたわけではないのではと思われるかもしれない。現に、たとえばローティは、『哲学と自然の鏡』において、言語的観念論の別名ともいえるセラーズの心理学的唯名論¹⁵⁾ について、人間が言語を覚える以前の「生（なま）の経験」の存在がそれへの反証になるのではないかと指摘している。だが、ローティがセラーズの議論を引きながら強調するのは、結局のところ人間が言語を覚える以前の段階は言語学習の原因ではあっても根拠ではないという点でしかない¹⁶⁾。すなわち、人間の動物的反応に固有の論理や役割を積極的に認めておらず、そのような反応を示す段階を言語学習によって消える

ものとしか捉えていない。それに対し、これから見るように、言語ゲームをめぐる議論は、実際にはローティが想定するようすで出来上がった世界だけではなく、徐々に出来上がっていく世界のそのプロセスを視野に入れたものである。

このような観点は、「言語ゲームを第一次的なもの」(PU, § 656) とみなしていた『探究』よりのちに書かれた『確実性』で本格的に現れるものである。そこには、各種言語ゲームを支える下部構造という意味で言語ゲームの世界の外部にあるものについての思索が含まれている。それは、平たく言えば、人間の動物的側面である。ウィトゲンシュタインは、言語ゲームが首尾よく続けられることそれ自体は言語ゲームが続くことの原因ではあっても根拠ではないとしながら、その根拠について次のように述べている。

ここで私は人間を動物として考察したい。つまり、本能はあるが推論能力は認められないような原初的存在として。… (中略) …言語は推論から生じたものではない。(ÜG, § 475)

モイヤル＝シャーロックは、ローティがあくまで出発点を(言語による)思考とみなしている点を批判し、ウィトゲンシュタインが見定めていたのは思考のさらに前段階の本能的行為や反応であると主張する¹⁷⁾。モイヤル＝シャーロックによれば、まさに「言語による思考のさらに前段階の本能的行為や反応」に目を向けているがゆえに、『確実性』は『探究』などと並ぶ主著と呼べる、革新的な著作になっている¹⁸⁾。現にウィトゲンシュタインは『確実性』において、二値性(真にもなるが偽にもなる)を越えた命題の言語化不可能な確実性について論じているが、そのような命題の居場所は本能的行為や反応以外にない。そして、我々が言語を学んだあとでも、言語化した途端に阻却可能性にさらされる各種の経験的命題とは次元の違う確実性を有する命題の、その確実性そのものを担保する場として、それらは機能し続ける。

ウィトゲンシュタインによれば、たとえば「私には手がある」のような命題は、言語によって語られるのではなく、我々の非言語的行為や反応の中で示されることで機能している。示されることによって、そのような命題は、真にもなるが偽にもなり、通常の検証プロセスでは哲学的懐疑論の想定に耐え切れないような他の様々な経験的信念とは別の次元で、それら信念の大前提となっているのである¹⁹⁾。むろん、同じ機能を果たすのは「私には手がある」だけではない。

そこに椅子がある、ドアがあるなどといったことを私が知っている、ないし、確信していることを示すのは、私の生活である。(ÜG, § 7)

「そのドアを閉めなさい」とひとに命令するとき、「そこにドアがある」ということは言語命題として信念化されることも、そのうえで真偽判定されることもなく、ただ命令遂行のための

見えない前提として機能している。多くの場合、ひとは命令に考えなしに従う。我々の日常生活は、このような見えない前提や本能的行為や反応といった、言語的实践とつながりながらも、それとは区別されるべき段階を下部構造（出発点）として備えている。

当然、ネーゲルが言語的観念論では歪曲されてしまうと考えた、世界の客観的实在や、過去や未来の出来事といった概念についても、言語ゲームの下部構造を視野に入れたうえで再考せねばならない。そこで鍵となるのは、やはり、言語を学ぶ以前の、動物的反応に頼って世界に相対している段階に位置する人間、つまり、子どもである。

この段階に注目することで、多種多様な要素からなる言語ゲームという掴みどころのないかたまりが多様性と同時に持つ個別性という別の側面が見えてくる。そもそも、学習のさい、子どもは多種多様な言語ゲームを一挙に身につけるわけではない。たとえば子どもは目の前の個別具体的な猫を見て「猫」という語を覚えるのであって、様々な種類の猫からなる「猫」というカテゴリーそのものをはじめに学ぶことはまずない。そのようなカテゴリーの使用は個別具体的な学習が成功してはじめて可能になる、個別具体的な猫の識別とはまた別種の言語ゲームである。

では、学習という観点から見た言語ゲームの個別性に注目することは、どのような意義を持つのか。ウィトゲンシュタインが言語ゲームという概念を導入したのは、言語に「ものの名前」程度の役割しか認めなかったかつての自らの哲学的理論を批判し、言語の役割の個別具体性と社会的実践性を強調するためである。先の「心的プロセス」批判も、言語を名前としてのみ捉えてしまう姿勢による弊害を扱ったものと考えることができる。

しかし、これは言語ゲームの個別性に注目することの意義であって、学習という観点から見た言語ゲームの個別性に注目することの意義とはいえない。後者を理解するには、ウィトゲンシュタインは、言語を「ものの名前」としてのみ捉えてしまう姿勢は批判したが、名前を学ぶことの必要性は認めているという事実を確認せねばならない。

ウィトゲンシュタインによれば、言語を「ものの名前」として学ぶことは、動物への訓練にも似た、原初的な言語学習として特徴づけられる²⁰⁾。しかし、それが意味するのは「言葉はものの名前である」というイメージが全面的に正しいということではなく、むしろ逆である。重要なのは、「教えるひとが対象を指して、子どもの注意をそちらに向け、それに伴って語を発音する、たとえば、石版の形を示しながら「石版」という語を発音する」(PU, § 6) という「訓練」(ibid.) の描写からも分かるように、我々は個々の「ものの名前」をそのつど教わるのであって、「言葉はものの名前である」という包括的イメージそのものを教わるわけではないということである。「言葉はものの名前である」というイメージは様々な「ものの名前」を覚えてはじめて意味をなすが、他の様々な言語の役割を考えると必ずしも正しいものではなく、そもそも獲得しなければならぬイメージというわけでもない。

では、「言葉はものの名前である」というイメージにはまったく役割がないのだろうか。そ

れを明示化し、あたかも言語の役割を包括した説明のように扱うならば、そうだろう。しかし、かといって、言語には名前としての役割もある以上、そのようなイメージにまったく居場所がないと考えるのも無理がある。それは、ひとが名前を学んだり、使用したりするさいの見えない前提として機能しているのである。

様々な実践を支える見えない前提の確実性について、たとえばワイトゲンシュタインは次のように述べる。

多くのことが確定したとみなされ、交渉から除外される。… (中略) …それが我々の考察、研究に形を与える。それは、かつては評価が定まっていなかったかもしれない。しかし、おそらく、考えられないほど古い昔に、我々の考察すべての足場へと組み入れられたのである。(ÜG, § 210,211)

「我々の考察すべての足場」とは「言語ゲームの世界の下部構造」のことであり、そこに組み入れられる「多くのこと」には、個別具体的な実践に応じて様々なものがあることになる。「そのドアを閉めなさい」と命令する場合にはドアや命令を受ける他人の存在を伝える視覚の確実性などが、石版の形を示しながら「石版」という語を発音して子どもに名前を教える場合には「ものには名前がある」というイメージや子どもの動物的反応の確実性などが、それぞれ実践の下部構造として機能しているのである。ただし、それら自体はすでに自覚的な実践（「交渉」）から除外されており、我々の注意を引くこともない。

ネーゲルは、本来ならば人間の言語的認識からは独立の過去や未来の出来事といった概念（「世界は我々が生まれるはるか前から存在していた」のような）が言語的観念論によって歪曲されてしまうことを指摘したが、彼が「我々がいまだ手にしていない（言語化できていない）概念」の必要性を説くのに対し²¹⁾、ワイトゲンシュタインがそのような理路を取ることはない。ワイトゲンシュタインに言わせれば、たとえば「計算とは何か」と問われて、いまだ手の中にない算術についての哲学的定義に思いを馳せるならば、その時点で独断論的発想（いまだ発見されていない答えによって解決される問題があり、それがあらかぎり我々は何も知らないことになる）²²⁾に捕らわれている。そうではなく、計算とは我々が子どもの頃に理屈ぬきに学んだ（暗記した）四則の規則であり、九九であるといってよい。哲学者は「我々が知りたいのは個々の計算ではなく、より確実な計算一般の規則なのだ」と返すかもしれないが²³⁾、そのような観点からは、すでに計算ができるのに計算を知らないはずがないという素朴な事実は捉えられない。むしろ、九九を教わるプロセスに九九の確実性そのものを教わるプロセスは存在しない。それは実践の中で示されるものである。

ここに計算間違いがあるはずがないということを通り越す規則をあなたが求めるとすれ

ば、我々はそれを規則から学んだのではなく、計算することによって学んだのだというのが答えになる。/ 我々は計算の本質を計算することを学ぶことで知るに至ったのである。(ÜG, § 44,45)

ひとはこのように計算する。計算とはこれである。我々がたとえば学校で学んだのは、このことである。あなたの精神という概念と結びついた超越的な確実性のことは忘れてしまえ。(ÜG, § 47)

同様に、ウィトゲンシュタインにとって、世界の客観的実在性は、ネーゲルの主張するようなこれからの概念探究(哲学)によってではなく、大地に立っていることといったような、非言語的なものも含む日々の実践を支える下部構造として、言語化されない形で把握されている²⁴⁾。過去や未来といった概念も、古い年号が記された文書を読む、一か月先の予定を立てるなどといった日々の実践の中に示されている。むしろ、我々は「世界が実在する」や「過去がある」などといったイメージ自体を直接思考(反省)対象として学んだわけではないだろう。我々は大地の存在を教わり、それに納得したから大地のうえに立つようになったわけでは決してない²⁵⁾。

言語ゲームの世界を支える下部構造には、原初的な言語学習を可能とする動物的反応と、学習が終わったあとの実践の見えない前提とがあるが、どちらも言語的实践には回収されないという共通点がある。この点を視野に入れると、ネーゲルのように言語的観念論を「あらゆる概念は言語化されて(さらに言えば、同じ言語を使用する人間の共同体内で共有されて)はじめて事実になる」と捉える必要はなくなる。

他方で、このような下部構造を認めることと「言語抜き思考そのものからなる世界」の実在を否定する穏当な言語的観念論理解はどのような関係にあるのか。言語的实践に回収されない次元が言語ゲームの世界と地続きにあるということは、『青本』などでウィトゲンシュタインが否定したはずの「言語抜き思考」を要請するのではないか。このように思われるかもしれないが、答えは否である。それが動物的反応であれ、実践を可能とする見えない前提であれ、言語ゲームの世界を支える下部構造はそもそも思考を要請しないからである。ウィトゲンシュタイン的に思考を「言語による思考」とみなしたとしても、言語ゲームを支えている下部構造は、なんであれ言語化を必要としないプロセスである。穏当な言語的観念論(およびウィトゲンシュタイン)が「言語抜き思考」を否定することは「言語抜き実践」を否定することにはならないのである。とはいえ、この点からすれば、穏当な言語的観念論理解もそのままでは受け入れられないことになる。このような下部構造の存在は、ウィトゲンシュタインの見解を表すものとしてローティが唱える「言語の偏在性」と共存可能ではあるが、他方で、世界の特徴がそれに尽きないことを示しているからである。言語ゲームの世界を支える下部構造は言語

化プロセスを経ない実践のみで成り立っているからこそ下部構造なのだ。では、このような下部構造（外部）ありきの言語ゲームの世界（日常世界）に目を向けることで新たにどのような展望が開けるだろうか。

まず指摘しておくべきは、言語ゲームの世界の複数性だろう。この点自体はすでに強調され（すぎ）ているものであるが、それを原初的な言語学習を可能とする動物的反応を視野に入れて捉え直すと次のようになる。仮にどれだけ動物的反応の普遍性を強調できたとしても、それに基づいて行われる学習が歴史や文化を越えて均一であることはありえない。当然ながら、どのような学習が行われるかによって何が見えない前提となるかも変わってくる。さらに言えば、子ども側は原初的な学習について選択権がなく、どのような言語ゲームが日常的なものとなるかは、学習を行う側に委ねられている。

次に指摘すべきは、日常的な言語ゲームの世界と哲学によって見える世界（観）との相違点だろう。ウィトゲンシュタインは日常世界こそ様々な言語が哲学（形而上学）から解放される「故郷」（PU, § 116）であるとしているが、結局のところそれらは何がどう違うのか。

すでに指摘したように、日常世界は学習によって与えられるものであって、哲学のように能動的に思考することによって意識して得るものではない。しかし、それ以上に重要なのは、学習のさい、何もかもが明示（言語化）されるわけではないということである。「言葉はものの名前である」や「過去がある」といったような、いわば常識的な命題や、「九九は正しい」といったような確実性は、個別具体的な学習では姿を現さない。学習の結果として与えられる実践が織りなす日常世界は、言語のみによって構成されたものでは決してなく、様々な非言語的实践や前提に支えられている。

対して、哲学はそこで言語化されていない前提を疑問視し、それとは異なる確実性を追及する作業といえる。そのためには、まず、そのような前提を顕在（言語）化する必要がある。その点からすれば、哲学は日常世界の与えられ方に自身の考察（反省）対象を委ねているといえる。だが、それはいわば教わっていないものによる反省であって、その時点で我々の実際の学習は形を歪められている。具体的には、哲学的反省においては、我々が知らなかったもの（実際に学んでいない諸前提）が知っていることにされ、我々が知っているものとされるもの（実際に学んだ個別具体的な言語ゲーム）が知らなかったものとされてしまうのである。

とはいえ、ウィトゲンシュタインにとって真に問題だったのは、すべてが言語的に明示されているわけではない日常世界を目の前にして、それを言語化して説明したくなる誘惑そのものであり、その結果得られる説明の出来不出来ではなかったとも考えられる。次に引用する『探究』での見解は『確実性』でも保持されているのである。「ここで難しいのは、いわば勇気を失わないことである。日常的に考えられるものの側に居続け、道を踏み外さないようにするという事を見て取ることが難しいのである」（PU, § 106）。

まとめとさらなる展望

「言語の意味源泉」なる領域を批判的に吟味し、「言語ゲームを第一次的なもの」(PU, § 656)とみなしていた『探究』の思索では「すべてが言語ゲームになった」ように見えた世界も、『確実性』に至る時点では、その姿を一変させている。前者を単純に言語的観念論の世界と呼ぶならば、『確実性』での見解を視野に入れた世界は前者をほぼそのまま飲み込んでしまう、前者とは別の次元の思索が含まれていると考えられる。そもそも言語ゲームの世界に入るには、言語的实践がまったく不可能な段階から、動物的応答を頼りに言語学習を成功させる必要がある。そして、そのような学習が伝えるのは個々の言語ゲームであって、それを用いた我々の実践を支えるすべての前提を言語化するプロセスはそこには含まれないのである。

さて、これらの点を踏まえて前節の最後で描いた言語ゲームの世界の特徴について生じると思われる疑問を今後の検討課題として挙げることで、本稿を閉じたいと思う。

まず、言語ゲームの世界の複数性から話をはじめよう。たとえばケニーは、自然主義、特に、科学的自然主義ではなく、神の視点を排する人間的な自然主義について論じながら、ウィトゲンシュタインが考える言語ゲームの下部構造が自然主義に尽きないものとして捉えられる可能性について言及している²⁶⁾。すなわち、宗教的文化が日常として教えられ、「神が実在する」といった超自然的で宗教的な命題が日々の様々な信仰実践の見えない前提となる可能性である。この点からすれば、言語ゲームの世界は、学習の背景の数に応じていくらでもありうることになり、ウィトゲンシュタインが許容する日常的な世界観も自然主義に尽きないことになる。

問題が生じるのは、言語ゲームの世界を日常世界と捉えた場合の、哲学が与える世界観との相違点について考えたときである。両者の区別を維持するには、哲学が行う言語的实践、すなわち、明示されていない前提を明示化する作業を言語ゲームとは認めない姿勢が必要となる。しかし、宗教に基づいた信仰実践が日常世界を形作るものとして伝達(学習)可能だと考えられたように、哲学に基づく言語的实践を捉えることは不可能とはいえない(それには哲学が反省材料とする日常実践の成立が、ある程度ではあれ、まず必要なのではあるが)。

すると、ウィトゲンシュタインにとって必要だったのは一種の倫理ということになるのではないだろうか。日常世界を「あるがまま」見ること、そこに説明を付け加えないことには、禁欲的な姿勢、すなわち、現に言語化されていないものを言語化しないままにするという姿勢が求められるのである。というのも、まさに哲学者が「言葉はものの名前である」といった信念について思弁したように、学習の段階で言語化されていないことは、その後も言語化できないことを決して意味しないからである。つまり、できるからこそ、やっつけられないという発想がそこには要請されるのである²⁷⁾。それとも、我々は一般に哲学をしないことが前提となるような学習を施されるのだろうか。否、そのような一般化は不可能である。

ウィトゲンシュタインが認める多種多様な実践の中には、「言語ゲーム」という象徴的な言

業とは別に、非言語的実践の領域さえあることを本稿は確認した。だが、それでも「哲学」という名の言語的実践をウィトゲンシュタインが認めていないのは明白であった。むしろ、両者は対立するとされていた。その対立の根拠として言語化（説明）指向の有無を本稿は指摘したが、そのさらに奥底に日常世界での態度決定（倫理）の問題があるのならば、真に問うべきは、日常世界と哲学との断裂ではなく、むしろ接点であり、つながりであるといえるだろう。日常世界を形作るための学習が進めば、それによって獲得した言語能力を使って哲学的思考（思弁、反省）も可能となる。にもかかわらず、そのような思考に足を踏み入れてはいけない（でなければ、「あるがまま」の日常世界が歪められる）とウィトゲンシュタインは主張しているように思われる。だが、このような姿勢を認めることは可能だろうか。この点についての検討は、言語的観念論を検討する作業とは別次元で行わねばならない、今後の課題である。

【注】

- 1) Cf. TLP, 4.05,4.06.
- 2) Cf. PU, § 23.
- 3) Cf. BB, p.5.
- 4) 多くの楽器の中から正しくバンジョーを選び分ける行為について、「我々は「彼は「バンジョー」という語に正しい解釈を与えた」と言うだろう」（BB, p.2）。そして、「我々が「彼は「バンジョー」という語にかくかくの解釈を与えた」と言い、解釈という明確な行為を、選ぶ行為と別に並んで想定しがちである」（ibid.）。つまり、「彼はバンジョーを正しく選び分けた」という文を「彼はバンジョーを正しく解釈し、そして、選んだ」のように分解することで、「選んだ」という身体的動作とは別次元の「解釈」という心的プロセスが導入されてしまうのである。
- 5) 「…我々が或る語の文法について当惑しており、それらが物質的対象の名として使われていないということ以外に我々が何も知らないとき、我々がすでに知っているのは、言い逃れとしての「エーテル的対象」のアイデアである」（BB, p.47, 強調引用者）。
- 6) Cf. BB, p.4.
- 7) Cf. Pears 1970, pp.179-182.
- 8) ローティによれば、「実在との対応という考えを一切捨ててしまう」（Rorty 1982, xvii）ことで「有用な知識を有用ならしめる当のものとは何か」という問題そのものから撤退したのがプラグマティストである。「真なる文はあるがままのものに対応するがゆえに有効である」ということが…（中略）…何も明らかにはしていないという教訓を引き出し（ibid.）してくれる哲学者はみなプラグマティストなのである。このように考えることで、我々は「実在・あるがままのもの」と「言語・文」という二分法を破棄するのである。
- 9) Cf. PU, § 114,115.
- 10) 黒崎は、自らの言語ゲーム一元論を、ローティが重視する言語論的転回ではなく、「言語論的革命」（黒崎 1997, p.94）に基づくものとしている。黒崎が言語論的転回を斥けるのは、そこに「哲学の実証科学化」というウィトゲンシュタインには見られない意図が潜んでいるからである（cf. ibid., pp.95-96）。しかし、ローティは言語論的転回の進行と科学的な実証主義の破棄とが同時的である（科学は客観的実在そのものに一致するから有用なのだという考えを言語論的転回は斥ける）と考えており（cf. Rorty 1982, xvii）、ゆえに、哲学の実証科学化を指向するか否かでもって両者の差別化を図ることはできない。
- 11) 一元論こそ名乗っていないが、中村昇は、ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論を人間の自然史を描くものとし、次のようにまとめている。「私たちの生活の個々の場面に、ことばは、透明な液体のように浸透している。だから、逆にいうと、そのような錯綜した行為連関のなかから、言語だけを切り離すことはできない」（中村 2014, p.153）。これはローティのいう「言語の偏在性」を説明したものとも理解

できる。

- 12) 「彼[ウィトゲンシュタイン]の意味の条件についての後期の見方には次のような含意があるように思われる。つまり、人間の経験と生活の限界の向こう側に辿り着こうとするものはすべて意味をなしえない。というのも、言語の適用における同意可能性は、存在しうる言語の實在のないし可能な使用者の共同体とともにのみあるものだからである。そのような同意可能性が規則的存在の条件であり、その正しい運用と間違った運用の区別の条件である」(Nagel 1986, p.105)。
- 13) ウィトゲンシュタイン的な有限主義は、通常、自然主義とも称されるが、そのさい意味されているのは、因果性を重んじる科学的自然主義ではなく、人間にとっての合理性を重んじる社会的自然主義である (cf. Medina 2004, p.79ff; Hanfling 2002 p.87ff)。
- 14) Cf. Nagel, op. cit., pp.105-109.
- 15) 「種類、類似、事実についてのすべての意識、短く言えば抽象的存在についての意識は－実は個体についてのものさえ、言語的である」(Sellars 1963, p.160)。
- 16) Cf. Rorty 1979, pp.182-183.
- 17) Cf. Moyal-Sharrock 2004, p.7; Moyal-Sharrock 2016, pp.24-25, pp.44-45.
- 18) Cf. Moyal-Sharrock 2016, p.1.
- 19) Cf. ÜG, § 3, 359.
- 20) Cf. PU, § 1-6.
- 21) 本文でも触れたように、ネーゲルは間主観的な世界（社会）においてすでに言語化されているものにも思考の範囲を限定する発想を批判する。しかし、それは既存の「主観/客観」図式に安住しないことも意味する。ネーゲルによれば、個人の思考による主観的視点の拡張によって客観的視点が開けるが、同時に、そのプロセスで主観的視点は客観視されずに残り続ける。そして、客観的視点があくまで主観的視点の延長である以上、實在する世界は主観的でも客観的でもない (cf. Nagel 1986, pp.4-9)。たとえば心身問題は、手持ちの「主観/客観」図式だけでは、心の物質的側面の統一と精神的側面の統一をいかに両立させるかといった問題を解決できない。それは心の實在に触れるには何か欠落した図式なのである。ネーゲルはその何かを「我々が持っていない何か」(ibid., p.51) とする。すなわち、すでにあるものを「あるがまま」見ることによってではなく、いまだないものをこれから発見する可能性に問題解決の糸口を見出すのがネーゲルなのである。
- 22) Cf. BT, p.418.
- 23) この点については、ウィトゲンシュタインが、すでに持っている個別的な知識に知識としての資格があることを認めず、あくまでいまだ持っていない「知識それ自体」の定義的説明を求めるソクラテスの姿勢を批判している (cf. BB, p.20; Plato 1973, 146d-e) 事実が参考になる。
- 24) Cf. ÜG, § 208, 209.
- 25) Cf. ibid., § 94.
- 26) Cf. Kenny 2011, pp.117-118.
- 27) この点については、鬼界彰夫が『論考』でのウィトゲンシュタインのスタンスを「安易な神秘主義」と批判的に捉えた議論が参考になる (cf. 鬼界 2003, pp.73-86)。本稿が『論考』ではなく『確実性』について論じたものとなっていることを踏まえると、そこには様々な興味深い問題があるように思われる。

【参考・引用文献】

*略記号を使用した著作については、その略記号を書物名の右側に記した。

- Hanfling, O. 2002. *Wittgenstein and the Human Form of Life*, London and New York: Routledge
- Kenny, A. 2011. Whose Naturalism? Which Wittgenstein?, In *American Philosophical Quarterly*, Vol.48 No.2, pp.113-118
- Medina, J. 2004. Wittgenstein's Social Naturalism: The Idea of *Second Nature* After the *Philosophical Investigations*, In *The Third Wittgenstein: The Post-Investigations Works*, edited by D. Moyal-Sharrock, pp.79-92, London and New York: Routledge
- Moyal-Sharrock, D. 2004. *Understanding Wittgenstein's On Certainty*, Basingstoke: Palgrave Macmillan

- Moyal-Sharrock, D. 2016. The Animal in Epistemology: Wittgenstein's Enactivist Solution to the Problem of Regress, In *Hinge Epistemology*, edited by A. Coliva & D. Moyal-Sharrock, pp.24-47, Brill
- Nagel, T. 1986. *The View from Nowhere*, New York: Oxford University Press
- Pears, D. 1970. *Ludwig Wittgenstein*, New York: The Viking Press
- Plato 1973. *Theaetetus*, trans. by J. McDowell, Oxford: Clarendon Press
- Rorty, R. 1979. *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton: Princeton University Press
- Rorty, R. 1982. *Consequences of Pragmatism: essays, 1972-1980*, University of Minnesota Press
- Rorty, R. 2013. Wittgenstein and the linguistic turn, In *Wittgenstein's Philosophical Investigations: A Critical Guide*, edited by A. Ahmed, pp.129-144, Cambridge University Press
- Sellars, W. 1963. *Science, Perception and Reality*, London: Routledge & K. Paul
- Wittgenstein, L. 1955. *Tractatus Logico-philosophicus* [TLP], London: Routledge & K. Paul
- Wittgenstein, L. 1968. *Philosophische Untersuchungen* [PU], Oxford: Blackwell
- Wittgenstein, L. 1969. *Generally known as The Blue Book and Brown Books* [BB], Basil Blackwell
- Wittgenstein, L. 1969. *Über Gewißheit* [ÜG], Basil Blackwell
- Wittgenstein, L. 2013. *The Big Typescript: TS 213* [BT], Wiley-Blackwell
- 鬼界彰夫 2003『ウイットゲンシュタインはこう考えた』, 講談社現代新書
- 黒崎宏 1997『言語ゲーム一元論: 後期ウイットゲンシュタインの帰結』, 勁草書房
- 永井均 1995『ウイットゲンシュタイン入門』, ちくま新書
- 中村昇 2014『ウイットゲンシュタイン「哲学探究」入門』, 教育評論社

Wittgenstein and Linguistic Idealism

TAKANO Yasuo

Linguistic idealism claims that there is no existence that really exists without language and that the world of the 'language game' is the only given for us. Many famous researchers think of Wittgenstein as a linguistic idealist and, in addition, endorse or criticize Wittgenstein with this theory in mind. In this paper, we criticize linguistic idealism and claim that this view needs to be revised in order grasp real fact of Wittgenstein's thought. Concretely, we confirm that Wittgenstein's thought range over non-linguistic behaviors and the process of learning which hold these behaviors as precondition in order to see ordinary life just as it is.